

M2 坂井孝行
M1 梅津泰宏
学部生 文 才理

小倉ゼミナール2012年6月第1ゼミ報告

I 事務報告

1. 日時

2012年6月9日(土) 10:00~18:00

2. 場所

放送大学東京文京学習センター2階 第1会議室

3. 出席者

小倉行雄先生 森 TA(ティーチングアシスタント)、小計2人、M2 牛山、杉山、坂井、小計3人 M1 沼野、早川、梅津、佐々木、鈴木、服部、小計6人 学部生 君塚、文、藤原、小計3人、ゲスト 佐藤、小計1人 合計15人

4. 時間割(変更後の実際時間割)

午前の部

- | | | |
|-------------|---|---------------|
| 10:10~10:55 | 本日のゼミオリエンテーション 小倉先生
①ゼミ宿題の意味と今日のゼミ内容の解説
②論文づくりにおける「型を学ぶ」 | |
| 10:55~11:15 | 休憩ストレッチ体操 | |
| 11:15~12:10 | 講義 小倉先生
①成功のコアセオリー
②ゼミでの学びかたの違いが成果を左右する
③教えると伝えるの違い
④因果のマトリックス
⑤論述文の構成パターン
⑥なぜ起承転結は論文で使えないか | |
| 12:10~13:45 | 昼食休憩 | |
| | 並行して、遠隔地のゼミ生他の個別面談
湯布院スタディツアー計画の説明 | 小倉先生
坂井、杉山 |

午後の部

- 13:45~15:20 午前中の小倉講義を理解するためのグループ討議
進行 杉山、坂井
- 15:20~15:30 休憩ストレッチ体操
- 15:30~17:00 6月宿題の優良解答の検討 小倉先生
梅津泰宏レポート
沼野良典レポート
佐々木敦子レポート
- 17:00~17:10 休憩ストレッチ体操
- 17:10~17:40 今日のゼミのまとめに関するグループ討議
進行 杉山、坂井
- 17:10~18:00 「今日のゼミのまとめ」 参加者からの一言

5. 配布資料

- (1) 日本経済新聞 2012年4月18日 会社研究 スタートトゥデイ
- (2) 日本経済新聞 2012年4月19日 健闘企業 隠れた収益源
- (3) 朝日新聞 2012年5月11日 記者レビュー 法律の神髄描く娯楽作
- (4) 日本経済新聞 2012年5月31日 東レ 炭素繊維フル生産
- (5) 日本経済新聞 2012年5月31日 文化 新藤兼人さんを悼む 佐藤忠男 40
面
- (6) 日本経済新聞 2012年5月31日 新藤兼人監督死去 39面
- (7) 日本経済新聞 2012年6月30日 文化 国文学者の想像力 高田衛
- (8) 朝日新聞 2012年5月28日 吉田秀和さん評伝 38面
音楽と戦後民主主義の関係を指摘
- (9) 朝日新聞 2012年5月29日 社説 吉田秀和さん 言葉の力を教えられた
- (10) 日本経済新聞 2012年5月29日 文化 吉田秀和さんを悼む 堤剛
音楽で日本復興 信念に
- (11) 朝日新聞 2012年5月28日 音楽評論家 吉田秀和さんを悼む 堀江敏幸
- (12) 朝日新聞 2012年6月9日 東電と官邸 対立のまま、原発放棄計画浮き
彫り
- (13) 小倉行雄 金型製造業の業態開発の可能性を探る
- (14) 矢幡治美『農協は地域でなにかができるか 大分大山町農協の実践』家の光協会、
1986年(抜粋)

Ⅱ ゼミ内容の報告

はじめに

6月定例ゼミの参加者は、小倉先生と森 TA を含め 15 人であった。前回 5 月定例ゼミに比べると、参加者数で 4 人増えた。内容は濃く、学び甲斐があった。これは、大きく 3 つの内容からなる。

第 1 は、小倉先生の講義である。これは、ゼミ運営とその引き上げを目指す内容である。具体的には、「成功のコアセオリー」とか、「教えると伝えるの違い」、「因果のマトリックス」などが講義トピックであった。先生の講義は、これまでのゼミにおいても折りにふれて行われてきた。しかし、今回、先生は新たに多くの資料を作成し、講義に臨まれた。この点がこれまでのゼミ講義と比べての違いとなり、中身の濃さにつながる。

第 2 は、6 月宿題の回答に関する検討である。6 月宿題は、「構成」をテーマとする。宿題の検討は毎月のゼミで行われるが、今回の講義内容と関連させていえば、どうやって宿題への取りくみをゼミのレベルアップにつなげるかがゼミ生にとっての課題になる。

第 3 は、グループ討議が行われたことである。しかも、今回は一日のゼミの中でもグループ討議は多用された。これは、ゼミ生に講義内容や宿題の検討結果をよりよく理解させることを狙っている。また、ゼミ内容に変化をつけるという副次的な効果もある。

1. 学びの基礎論

小倉先生の講義

ゼミ生の学びの内実を引き上げるため、小倉先生から講義が行われた。以下は、この内容である。

(1) 放送大学の大学院生が置かれた客観的な位置を知る

学びで効果をあげるには、まずは自分の置かれた客観的な位置を知る必要がある。この点で放送大学の社会人大学院生の場合はどうか。

これをみるため、比較対象として研究者養成型大学院における院生の状況を取り上げる。脚本家の内館牧子は、著書の『養老院より大学院』（講談社、2006 年）で自分の大学院生活の経験（東北大学大学院文学研究科修士課程宗教学専攻）を報告している。それによると、院生の中には、寝袋を持って研究室に泊まり込む者がいるという。これはゼミで報告をする準備や調べる作業を行う必要からのことである。つまり、研究者養成型の大学院で院生になることは、毎日、膨大な時間をかけて調べる作業を行って当たり前の生活に入ることの意味する。これの一端を示す例である。

では、放送大学の大学院生はどうか。これは調べることや研究中心の生活とは大きく違う。しかも通信制の大学院であるから、ゼミのために集まるといってもせいぜい月に 1 回

程度でしかない。指導者によっては、そうしたゼミさえ年に2～3回しか開かないところもあるという。これは放送大学の場合、院生の力が十分にあり、今すぐ論文やレポートを書けるから、このように緩い状況にあるのだろうか。そうではない。放送大学の院生の力は、一般に論文を書く以前の段階にあるとあってよい。実際、わかりやすく的確に伝える文章がどの程度書けるかといえば、論文やレポートはおいてメモやレジメ、メール文でさえ十分には書けない。ところが、当事者の自覚がどの程度かといえば、通信教育の日常教育の実体のなさを反映して、こうした現実になかなか目が向かず、自分の置かれた客観的状況への認識は弱いとあってよい。

(2) 小倉ゼミの狙いと2011年度にやったこと

放送大学院生の現状はこのようなものである。しかし、小倉ゼミで学ぶからには、こうした実態を反面教師にしてゆきたい。それは仕事を持ちながら学ぶという厳しい状況の中にあるからこそ、身の丈レベルのささやかな成果は得たいという思いが強くあるからだ。

では、そうした成果を得るにはどうすればよいか。また、それはゼミとしてどのように提示すれば効果的であるのか。個人として成果を得る方法については、別にふれる。そこで、ここではゼミとしての成果の示し方を述べておく。そうすると、ゼミとして成果を出すとするなら、第三者が明確につかめるかたちで提示するのがよい。刑事用語を使うなら、「ブツ」により示すことである。こうしたことを意識し、2011年度の小倉ゼミでは、次のような活動を行ってきた。ゼミ授業の実況中継DVDの制作、『論文づくりの方法論』(2012年版)の刊行、ゼミホームページの開設、ゼミの協働プロジェクトとしてのフィールドワーク報告書の刊行、ケース授業報告書の刊行などである。これらは、いずれもゼミ活動をブツで示したものである。これにより、ゼミ活動のかなりな部分が見える化され、次のステージへ向けた活動の踏み台の役割を果たすことになる。

2. ゼミ運営を向上させる

小倉先生による講義

次いで、ゼミ運営を向上させ、ゼミとしての力を引き上げるための講義内容である。ここではゼミの抱える課題に即して、いくつかのトピックが取り上げられた。

(1) 成功のコアセオリー

ゼミ生にもっと力をつけるには、どうすればよいか。ゼミ生の自発的努力に俟つのは現実問題として有効でない。むしろ、ゼミ生が成長せざるを得ない環境をつくる必要がある。このため、ゼミのやり方を見直してみる。これはどのように行えばよいか原理的に明らかにするため、成功のコアセオリーを援用する。成功のコアセオリーとは、組織の力をパワーアップするための方法である。組織の質を引き上げ、組織の力がらせん的に向上する筋道を明らかにする。これによると、関係の質の向上から始まる好循環の輪を廻せということになる。より具体的には、次のようなことである。

① 関係の質

成功のコアセオリーは、関係の質の向上から始まる。関係の質とは、組織を構成するメンバーが取り結ぶ関係性のことである。一人ひとりの動機づけや、自己実現、成長を志向する姿勢のことである。まずこれらを引き上げよという。

これをゼミの場合に置き換えてみる。そうすると、論文を書くことは、基本的にゼミ生一人ひとりの作業である。ところが、ゼミは何人かのゼミ生が論文を書くために集まる場である。そうであれば、ゼミにおける関係の質の向上とは、ゼミ生がゼミに自然と集まることでもって代替的な指標としてもよからう。このため、ゼミ生がゼミに集まりやすくする仕掛けがもたえられる。これには、ゼミ活動を通し、自分の力が高まったことが容易に確認できるような状況をつくることが考えられる。あるいは、ゼミ生が相互に切磋琢磨し、ゼミとしてのパワーアップが感じとれるようにすることもよい。こうしたことにより、ゼミに参加すれば明確なプラスの内容があるとゼミ生に感じさせ、ゼミに集まることに意味を持たせる。こうすれば、ゼミの集まりは自然体のうちによくなる。

② ゼミ生の考え方

ゼミにおける関係の質の向上は、ゼミ生の物事のとらえ方や考え方に影響していく。つまり、ゼミにおける関係の質が変わると、ゼミ生の学び方も変わってくる。さらに、ゼミにおける学び方が変わってくれば、ゼミ生の物事のとらえ方、考え方は変わる。たとえば、論文づくりや仕事力の向上を図る上で、「みる、きく、よむ」という情報的基礎力がどれだけ大事かはゼミ生もこれまであまり意識したことがないであろう。しかし、学び方が変わると、「みる、きく、よむ」などの情報的基礎力がいかに大事か気づくようになる。これが、ゼミ生の成長を基盤的なところから支えていく。

③ 行動の質

ゼミ生の気づきの力が日常行動的な次元で高まれば、ゼミ生の日常的行動が変わる。たとえば、ゼミにおける宿題の例でみてみよう。ゼミの宿題も、はじめは先生から出される宿題に受身的に対応するだけで精一杯である。しかし、ゼミ生にゼミ宿題を課し、各自の宿題回答はメーリングリストで提出させる。ここから、ゼミ生の宿題回答情報は共有化され、他ゼミ生のすぐれた宿題回答と自分の回答を比較できる状況が生まれる。さらに、ゼミにおける実地訓練と気づき次第では、どれがよい回答か見分ける力がついてくる。進んでは、わかりやすい文章を書く力もつく。要するに、宿題を契機としたゼミ生の気づき方如何で、ゼミ生の宿題に対する取りくみ方は変わってくる。そこから行動の質が上がる。

④ 結果の質の向上

ゼミ活動を通じ、ゼミ生の行動の質が上がれば、その結果として実績が生まれてくる。実績はゼミ生の自信の元になる。これがゼミ生のゼミに対する姿勢や準備の仕方を変える。さらに、ゼミにおける集団の質や風土を変え、ゼミとしての全体的な力を引き上げる。こうして、結果の質の向上が図られることになる。

(2) 教えることと伝えることの違い

次に、ゼミにおいて教えることと伝えることには、どのような違いがあるかみていく。教えることと伝えることの違いといっても、一般には、それほど両者に違いがあると思わないかもしれない。

では、そうした違いはどこにあるか。ここで、教えるとは、知識レベルの次元のことである。これに対し、伝えることは、気持ちや考え方を相手と共有することであり、気持ちや考え方を相手のものにしてもらうことである。もっといえば、相手がその内容を自分のものにし、自分から行動できるようにしてもらうことを意図する。つまり、伝えることは、相手の行動に影響しようとする。この意味で、相手の考え方や意識にかかわることである。そうすると、ゼミのDNAなどは、教えるというより伝えるべきものの一つに入るであろう。理念やビジョンも、教えるというより、むしろ伝えていかないと相手のものにならない。

一方、ゼミで教えることでいえば、役割分担の面では、明らかに先生の役割である。ただし、この場合も、伝えることを意識すると、先生だけではすまなくなる。ゼミでいうなら、先輩や仲間が含まれてくる。さらに、職場の場合に例をとると、「いい仕事」を行うには、組織メンバー同士での伝え合いが不可欠になる。たとえば、見本、やり方、方法を示し、見えるかたちの行動により伝え合う。そこで、ほんとうに相手の行動を変えたい場合は、事務連絡でさえも、伝える姿勢で行う必要がある。

このようにみえてくると、教えることより伝えることの方が大事であるかのような印象を受けるかもしれない。しかし、それは必ずしも正しい理解とはいえない。教えることと伝えることは、どちらか一方だけを行えばよいというものではない。むしろ、両者の違いや相手の発展段階をよくとらえ、適切に使いこなす必要がある。実際、成功のコアセオリーを廻すことは、これにより初めて可能になる。

(3) 因果のマトリックス

ゼミ活動をする上でも、物事を判断するための基本的な軸があることが望ましい。こうしたものとして、因果のマトリックスがある。因果のマトリックスとは、考え方の方法の一つである。これは物事をつかむ上で、どうやって手近な手がかりから見えない本質に近づけばよいか教えてくれる。

われわれにとって、目に見えてつかめるものが何かといえば、それは過去の結果である。しかし、結果だけで物事の意味を正確にとらえることはできない。しかも、先行きどうしたらよいかになれば、なおさらである。そもそもよく考えてみると、結果から結果は生まれない。まして、過去の結果から将来の結果は引き出せない。なぜそうした結果になるかを明らかにするには、結果が生じた原因にまで遡らないといけない。

だが、人は結果から結果をもとめるような簡単な誤りなどしないかといえば、そうはいえない。自分の問題に対してとる態度でいうなら、結果から結果をもとめるに等しい場合

がほとんどである。つまり、目の前にある誰でもつかめる現実から、将来のことを判断しようとする。あるいは、わかりきったことに頼り、すぐに手近な答えをもとめるなどはよくありがちである。そこで、与えられたことや結果からは、常に原因に遡る態度が大事になる。こうした訓練を自分に課し、日常的に行うようにする。これがほんとうの意味での分析作業になる。

3. 宿題や他者レポートの見方から論文の構造の理解へ 小倉先生の講義

次いで、宿題回答の検討に入る。だがこれを行うには、宿題にコメントができるようにならねばならない。このため、他者レポートの見方から論文の構造の理解に関する基礎論の講義を行う。これにより、他者レポートの見方から発してレポートへのコメントができるようにしたい。

(1) 他者レポートにどうコメントするか

宿題の検討をすることは、それにコメントしたり、評価するという点からみれば、他者レポートに対する的確なコメントや評価をどう行うかの問題に他ならないといってよい。

では、他者レポートのコメントや評価は、どうすればできるようになるか。これは論文づくりのプロセスでいうなら、コメントや評価を行う前のプロセスに遡る。すなわち、他者レポートの読み方に話しは戻ってくる。より具体的には、ゼミ宿題の回答がメーリングリストにより送られてくる。これを受けて、ゼミ生は他ゼミ生のレポートをプリントアウトするであろう。このとき、やるべき作業がある。それは、このレポートの余白にコメントや評価を記入しておくことである。レポートを読んでどこがいいと思ったか、何が評価できるかなどに関し、短い言葉で具体的にメモする。あるいは、○、△、×などの記号で簡単な評価をしておく。これはレポートをプリントアウトし、読んだときすぐに行わないといけない。そうしないと、そのときはメモしようと思っても、実際は機会を逃してしまう。

さらに、他者レポートへのコメントは、素早く自然に出てこないと、実際では使えない。そこでどうするか。これには、レポートを読むというより、むしろ絵のように眺める。あるいは映像のように見ることである。もっといえば、レポートの全体を一望し、一覽的に見るようにする。これにより、レポートの表記書式など外形的にみた全体像が目に入る。ここから全体的なコメントが出てくる。また、レポートの文章部分は一旦置いて、目次だけでみることも必要である。もし文章の中から目次だけ取り出してみることに慣れていなければ、文章部分は手指で隠し、大項目の目次だけみるようにする。この大項目の目次だけでみたとき、そこに整合性や流れがあるかどうかみていく。ここからも、いくつかのコメントが出てくる。

(2) 他者レポートはどう評価するか

次いで、他者レポートの評価は、どう行ふかの具体論である。これには評価項目をいくつかあげ、チェックリスト的なかたちにして行ふのがよい。たとえば、以下のようなことは評価の着眼点になる。レポートがここで述べることを満たしているなら、プラスの評価になる。逆であれば、マイナスの評価になる。

まず、論点をわかりやすく説明しているかどうかである。次に、見出しは短く、的確なものか。見出しだけでも意味が伝わるか。見出しの配列や順序立てはよいか。説明は、大事なことを先に述べているか。わかりやすい展開であるか。叙述の流れがよいか。具体例はあるか。問いに対し、答えと理由が書かれているか。「はじめに」と「おわりに」はあるか。「おわりに」は単なる感想に終わらず、結論になっているか、といったことである。

(3) 論文の構造を理解する

ここからは、宿題の検討に関連して、論文とはどういうものかみていく。このため、論文の構造について検討する。ここで論文における構造とは、論文であるために欠かせないものである。

いま論文を書式的な形式面からいえば、序論、本論、結論の3層構造からなるものといえる。ただ、論文の基本構造が序論、本論、結論であるという意味は、単にそれだけで終わりになるものでない。論文には、意味的な最小のまとまりの単位がある。これがパラグラフである。パラグラフは、その中に論文の構造と同じ3層構造を有する。つまり、パラグラフの冒頭には、トピックセンテンスが置かれ、これがパラグラフの主題を述べる。次にサポーターセンテンスがくる。これはトピックセンテンスで述べた論題の理由や、根拠、裏づけ、論証になる。パラグラフの最後には、コンクルーディングセンテンスがくる。つまり、パラグラフは、その中に論文的な3層構造を有する。この点で、パラグラフは論文の基本構成単位になる。

このようにみえてくると、日本語でいう段落とパラグラフの間には、根本的な違いがあることに気づく。なぜなら、パラグラフは上のおりのものであり、構造を持つ。一方、段落はその内部に明確な構成要素を持たない。このため、構造を持つとはいえない。さらに、ここでもう一つ注意すべき点がある。それは論文が序論、本論、結論からなるというが、単層構造でないことである。つまり、基本単位としての序論、本論、結論が次々と組み合わせ、全体の構造をつくる。この意味で、論文は基本単位の重層的な積み上げ構造、あるいは入れ子構造からなるといえる。

(4) 論文づくりと構成作業の関係

このように、論文の内容は、重層的な積み上げ構造を持つ。それゆえ、立体的で複合的な構造という性格も帯びざるを得ない。これに対し、文章は基本的に単線構造的な性格を持つ。そうすると、論文を書くには、論文の内容が持つ立体的で複合的な性格と文章の単線構造的な特性を折り合わせていかなければならない。これは言い換えれば、文章は本来

的に単線構造的なものである。ここに論文が持つ立体的で複合的な内容を入れ込むにはどうすればよいかという問題が出てくる。

これには、立体的で複合的な内容と構造を平面的なものに移し替えるという意味で、論文の内容が持つ立体的で複合的な構造を平面上であらわすものが必要になる。つまり、論文の構造を表出化ないし見える化し、単線構造の文章に置き換えることを可能にするものがとめられる。これが論文の見取図とか設計図であり、あるいは目次的なものである。論文を書くには、論文づくりにかかる見取図や設計図、目次的なものがないとできない。そうであれば、論文づくりにおける構成作業とは、論文づくりの見取図や設計図、目次的なものをつくる作業といっても過言でない。

(5) 論文では起承転結形式は使えない

ここで、論文づくりでは、起承転結形式の文章は使えないという問題にもふれておくことにしよう。これは、日本の場合、文章を書くことは起承転結の型に沿うことであるという誤った観念があまりに流布しているからである。まず、論文は、先のように論理的な構造（この意味での重層的な入れ子構造）を持つ形式であるが、起承転結はそうした構造を持たない。これが根本的な違いであり、起承転結が論文には適さない第1の理由になる。

第2は、文章の叙述の仕方の違いである。論文はある事象や問題を取り上げ、そこに潜む問題構造を解明し、その解決方向を論証的に示す。ここでの問題提起・問題設定から論証、さらに結論へと至る流れは、一貫したものであり、一義的で正確なものである。これに対し、起承転結形式は、問題設定から論証、結論を一貫して追うものではない。そうではなく、対象をとらえる主体の心情や心象風景の描写に主眼がある。したがって、その内容は、揺れや転換、飛躍があつてまったく構わない。

第3は、結論的なものの性格の違いである。論文における結論は、論証して得られた結果であり、論証の方法が正しいかどうか検証可能な性格のものである。それゆえ、論文では、結論も実質的には初めに提示されることが多い。つまり、論文において序論という中には、結論が実質的に含まれている。この点からいえば、論文の形式は「序論、本論、結論」といわれるが、実は2つの結論により、論証としての本論部分を挟み込むサンドイッチ構造からなるといってもよい。さらに、こうした構造に着目すると、この構造は論文だけでなく、仕事文、実用文においても共通する。

これに対し、起承転結形式の結は、論文という結論ではない。「起・承・転」のかたちで心情や心象風景を写しとり、その締め、ないしまとめとしての句である。論理的な意味という結論とは大きく違う。また、起承転結形式では、結論は最後にくる。のみならず、この結論は一義的なものでない。相手の受けとめ方にその意味を委ねる側面がある。このような論述の仕方は、一貫性と一義性、正確性を重視する論文の形式にはふさわしくない。以上の理由により、論文に起承転結を使うのは適切でないということになる。

4. 宿題の優良解答をみる

このような検討の上に立ち、「構成」をテーマとする6月宿題の優良解答についてみていこう。これに対する検討結果のあらまは、次のとおりである。

(1) 梅津レポートの評価点

①構成がある

宿題における問いは、7つあった。それに対して、梅津レポートでは、柱を3つに絞って回答している。わかりやすい構成での説明といえる。

②4月から6月までの宿題に流れがあることをとらえている

梅津レポートでは、各月における宿題テーマの流れを指摘する。他者のレポートにないことである。具体的には、4月は表記や書式の大切さを学んだ。5月は先行研究と下調べの方法を学んだ。6月は論文の構成を学んだという指摘をしている。

③具体例をもって説明している

具体的に書くことは、先生の宿題の手引きで明記されているとの注意を向ける。

④結論が先にある

梅津レポートは、結論を先に出した構成をとる。結論を先にもってくると、読み手にとって筆者が何を言いたいかわかりやすくなる。

⑤見出しだけでも内容がわかる

梅津レポートは、見出しだけでもかなり内容がわかる。わかりやすい文章は、その文章で何を伝えたいか、見出しだけでも理解できる。

(2) 沼野レポートの評価点

①見出しが短く、わかりやすい

沼野レポートの見出しは短い。ここで見出しは、長いほうがよいか、それとも短いほうがよいかを問うてみよう。答えは、短いほうがよいである。理由は、その方が読み手にとってわかりやすい。少なくとも、その可能性が高くなるからである。

②構成がある

梅津レポートも同様であるが、沼野レポートでは、7つの問いに対し3つにまとめた回答で答えている。このように的確な構成があると、文章はわかりやすくなる。

③最初に何を伝えるか述べている

沼野レポートでは、「はじめに」の部分でこれから何を伝えるかを述べている。これがあかないかで、わかりやすさは大きく違ってくる。ただ、文章をよりわかりやすくするという点では、この部分はもう少し手直しをした方がよい。具体的には、「これから3点のことを述べる。1つ目は、・・・」というようなかたちにするのである。

④論証、具体例がある

沼野レポートでは、具体例をあげて、論証している。これは、対象を主観的でなく、客

観的にとらえている証拠である。論文でも、この視点が必要になる。

(3) 沼野レポートの改善点

文章が全体的に長い。短くできる部分は、もっと切った方がよい。なぜなら、長い文章はわかりにくく、読みづらいからである。したがって、文章をつくるときは、常に短く切ることを意識する。また、ワンセンテンス、ワンアイデアを意識し、一つの文では一つのことをいうようにする。一つの文に複数の内容を入れ込ませない。そうすれば、文章は短くなる。ただし、ワンセンテンス、ワンアイデアの基本を身につけるには、訓練が欠かせない。これは、知っているだけでは身につかない。

(4) 佐々木レポート

①評価点

論点に対する判断の根拠が明確である。たとえば、『論文づくりの方法論』のどのような記述に基づき、どのような判断をしたかが明確に書き込まれている。

②改善点

7つの問いに対して、7つの回答をしている。これはよく言えば、素直な答え方である。しかし、問いに対する構成がなされていないことになり、結果はわかりにくくなる。

5. 6月ゼミの感想的なまとめ

(1) 充実したゼミ内容

最後に今回のゼミのまとめを行ってみる。しかし、時間的な制約もあり、まとめは十分ゼミ生全体のものにできなかった。そこで、筆者の個人的な感想で書くことにする。そうすると、今回のゼミはとても楽しかった。この理由としては、今回のゼミ内容とその流れを踏まえれば、次の2点になる。1点目は、先生の講義がよかった。成功のセオリーなどの資料に基づく講義がわかりやすかった。2点目は、グループディスカッションがよかった。グループディスカッションにより、参加者個人の考えでは及ばない理解が得られたことである。これは小倉ゼミの進化を示していると思う。

(2) 参加することに満足感が出てくる

さらに、今回のゼミは、学びの充実感があった。ゼミに参加しての満足感が大きいといってもよい。この理由は3点ある。

1点目は、前回からの積み上げを感じることができたことである。とくに、第2ゼミ以降の第3ゼミ、第4ゼミに至る流れが、6月定例ゼミに反映してきていると思う。

2点目は、授業内容の多彩さと場面転換のよさである。先生の講義からそれを理解するためのグループ討議、宿題の優良解答に関する共同検討、さらには頻繁な休憩と昼には休憩時間を割いた遠隔地のゼミ生に対する個別指導までである。

3点目は、講義内容の密度の濃さである。これには上の授業方法の工夫にかかわる部分も関係する。しかし、より講義内容に関係することでいえば、たとえば起承転結および論文の入れ子構造の講義がある。これはゼミに参加して先生の講義を聞き、ようやく体感的に理解した。漠然としたとらえ方では、起承転結にも「起、承、転、結」という構造があるように受けとめてしまう。しかし、論文形式にみられる入れ子構造やパラグラフといった要素は、起承転結には存在しない。また、起承転結の「結」は、一義的な性格のものでない。「起承転」まで感覚的に提示しておき、「結」をどう解釈するかは相手に委ねる。この意味でいえば、「結」といっても、論理的な結論とはかなり違う性格のものである。

いずれにせよ、今回のゼミで大事なことは次の点にあると思う。小倉先生は、ゼミ生に対し、性急な結果や自分だけの狭い成果はもとめておられない。ゼミ生の行動をどう変えたら全体的な成果につながるかの基本を教えていただいている。そうであれば、なおさらであるが、小倉ゼミにおいては、ゼミ生の力を寄り集め、成功のコアセオリーでいう螺旋的で質的な発展を目指すべきではないか。もっとひらたくいえば、2年の期間が終わっても、自分はゼミにとどまり、後輩の育成に貢献する。そうしたゼミのあり方を目指したいということである。

(3) 小倉語録

まとめのおまけである。小倉先生がゼミの中で言われるなにげない一言でも、耳に残ることは多い。これを小倉語録として記す。たとえば、以下のようなことである。

①素直さがセンスを引き出す

②会議の論点を示せ

グループ討議で意味ある意見交換をするには、漫然と参加者の意見をもとめてはならない。常に論点を明示して、それに沿った発言をもとめるようにする。

③物事はやり方が大事である

小倉ゼミの方法は、誰でもやれる。年齢・時間・能力の違いは問わない。やり方が大事である。

④俯瞰的にみよ！

物事を全体的にとらえるには、俯瞰的にみる習慣をつけるのがよい。